

子ども健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)  
論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Environments Affect Blood Pressure in Toddlers: The Japan  
Environment and Children's Study

和文タイトル:

環境因子が小児血圧に与える影響  
— 子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)から—

ユニットセンター(UC)等名: 宮城ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Pediatric Research

2023 年:

DOI: 101038/s41390-023-02796-8

筆頭著者名: 金森 啓太

所属 UC 名: 宮城ユニットセンター

目的:

本研究では、日本人幼児の血圧値と、体格、基礎疾患、環境要因などとの関連を検討することを目的とした。

方法:

詳細調査で収集したデータを使用し、2、4 歳の年齢別血圧の平均値・中央値を算出し、出生体重、体格(身長、体重、Body Mass Index (BMI)、体表面積)、肥満度、fT4 値、TSH 値、父母の体格(身長、体重、BMI)、母の高血圧との関連について検討した。また、2、4 歳時のそれぞれの血圧について、性別、既往歴、安静時・啼泣時、父母の喫煙歴、飲酒歴、学歴、両親いずれかの喫煙歴の有無で比較し、それらの項目について重回帰分析を行った。

結果:

2 歳時では、肥満、男児であること、親の現在の喫煙が収縮期血圧の高さに関連していた。4 歳時では、肥満、男児であること、妊娠高血圧、親の現在の喫煙、母または父の学歴が低いことが収縮期血圧の高さに関連していた。喫煙について、両親ともに喫煙なし、片方が喫煙あり、両親ともに喫煙の 3 群で解析したところ、2・4 歳のいずれにおいても、両親喫煙群では他の群に比べ、有意に血圧が高値であった。収縮期血圧値が 95 パーセンタイル値以上の群では 95 パーセンタイル値未満の群に比べて有意に肥満度が高かった。

考察(研究の限界を含める):

本研究によって、受動喫煙や肥満は幼児期の血圧の高値に関連しており、将来の高血圧につながる可能性が示唆された。一方、本研究の限界として、受動喫煙の程度が、両親の喫煙の有無のみで判定されており、1 日の受動喫煙の長さや期間で判定されていない点があげられる。

結論:

2 歳、4 歳の健常児の血圧平均値を算出した。肥満、男児であること、親の現在の喫煙は、2 歳時の血圧に影響を与えた。幼児期からの受動喫煙が将来の高血圧につながる可能性も示唆された。